

<p><b>1 学校教育目標</b></p> <p>自ら学び、共に生きる西与賀っ子の育成          &lt;目指す学校像&gt;          “あいさえお”で取り組む学校          あ…あいさつが響き合う学校          い…いのちを大切に作る学校 …いじめのない学校          う…うつくしい学校 …心の美、校庭等の整然美          え…えがおいっぱい学校          お…おもいやりがあふれる学校          &lt;目指す子ども像&gt;          “人を愛し、自然を愛し、ふるさとを愛する子ども”          ○「西与賀っ子」の合い言葉          に…にこにこあいさつする子(心づくり)          し…しっかり勉強する子(知づくり)          よ…よろこんで働く子(心づくり・体づくり)          か…からだをきたえる子(体づくり)          つ          こ…こころをみがく子(心づくり)</p>	<p><b>2 本年度の重点目標</b></p> <p>①「心づくり」          ・心の教育の推進と規範意識の醸成          ・落ち着いた学校生活の醸成          ・「いじめ・命を考える」取り組み、ふれあい道徳の実施          ・特別支援教育の推進          ・生活科、総合的な学習の時間を中心とした体験活動の充実          ・家読の推進          ②「知づくり」          ・学習習慣・生活習慣の定着、学習の基礎基本の定着          ・「知づくり」「心づくり」「体づくり」を中心に据えた校内研究の実践を通じた指導力の向上          ・ICT機器の活用やTTIによる指導の充実を図り「楽しく・わかる授業」を通じた確かな学力づくり          ・生活科・総合的な学習の時間を活用した学びの連続性と対話的な学びの充実          ・読書を通じ、本に親しむ子どもの育成～心の栄養、知づくりの推進～          ③「体づくり」          ・健康教育・食教育の充実          ④「地域・家庭と共に歩む学校づくり」          ・開かれた学校づくり、市民性を育む教育の推進          ・なかよしふれあいロードの活用          ・幼保小中連携の取り組み</p>
--	---

A: ほぼ達成できた  
 B: 概ね達成できた  
 C: やや不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
①							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	道徳授業の充実 落ち着いた学校生活の醸成	○命・いじめに関わる授業「ふれあい道徳」を実施し、命の大切さについて考える。 ○アンケート項目「学校生活を楽しくしている・友達や地域の人に優しくできる」において、達成率を児童・保護者ともに90%以上とする。 ○日々の掃除の充実、くつろえ、あいさつを今年度の指導のポイントとし、児童の達成率を90%以上にする。	・「先生あのねタイム」を設定し、担任と個別の面談を実施し、児童理解を図るとともに、信頼関係作りをしていく。 ・道徳の時間を確保し、児童の実態に即した年間計画を立て、実践していく。 ・学期に1回人権集会を実施し、集会に向けて学級で取り組んだり、集会後にクラスでふりかえりの話し合いをしたりして人権意識を高めていく。	A	・Q-Uの結果を受け、毎月の「おしえてねアンケート」や、「先生あのねタイム」で一人一人と話す時間をとり、児童が悩んでいることや困っていることに対して、しっかり話を聴きとり、対応することができた。 ・道徳教育の全体計画(別業)を各学年で作成し、全学年で系統立てて指導を行った。 ・アンケート項目「学校は楽しい」の達成率は、児童は75%、保護者は93%であり、「友だちにやさしくしている」の項目は、児童は95%、保護者の「学校は、子どもに、人権意識や思いやりの心を育てている」という項目の達成率は94%という結果であった。目標の90%以上を達成することができた。 ・アンケート項目「靴箱の靴はそろえている」において、達成率が児童では90%、保護者では91%以上という結果で、目標である90%以上を達成することができた。	・「おしえてねアンケート」を行うことで、子どもたちの悩みや困り感を知ることができた。実施して見えてきた問題点やその解決に向けて取り組みができたので、今後も続けていきたい。 ・Q-Uの結果を受けて、道徳や学級活動の時間などを活用し、児童の実態にあった重点指導項目の道徳の授業を行うようにしたい。また、自己肯定感を高めたり、楽しめたりするような取り組みを行ってきたい。 ・学期に1回の人権集会の取り組みを通して、命の大切さを考えたり、思いやり・やさしさの心を育むことができた。おしえてねアンケートの結果を受けて、道徳や学級活動の時間などを活用し、児童の実態にあった重点指導項目の道徳の授業を行うようにしたい。また、自己肯定感を高めたり、楽しめたりするような取り組みを行ってきたい。
教育活動	●いじめの問題への対応	学級経営の充実 保護者と連携した児童理解	○毎月、児童と保護者へいじめ・命のアンケートを通じ、いじめの早期発見、早期対応に努める。 ○アンケートに記載された意見等については、学期毎に保護者に紙面にて報告し、理解を求め、いじめ等の未然防止に努める。 ○いじめにつながる事案が発生した場合には、学校とPTAが連携を密にし、いじめを許さないという毅然とした態度で対応を図る。	・毎月、児童と保護者へいじめ・命のアンケートを通じ、いじめの早期発見、早期対応に努める。 ・アンケートに記載された意見等については、学期毎に保護者に紙面にて報告し、理解を求め、いじめ等の未然防止に努める。 ・いじめにつながる事案が発生した場合には、学校とPTAが連携を密にし、いじめを許さないという毅然とした態度で対応を図る。 ・西与賀小「いじめ0(ゼロ)」について全校集会等で児童と確認していく。	A	・毎月、児童と保護者へいじめ、命のアンケートを実施し、児童の生活の様子や友だち関係などを知ることができ、指導や助言につなげることができた。 ・保護者から提出されたアンケートは、すぐに管理職に報告し、管理職と相談しながら対応することにより、保護者との信頼関係を築くことに効果的であった。 ・いじめ事案として4件、市教委に報告したが、早期に担任、管理職、保護者と連携して解決に向け対応したため、深刻化することはなかった。但し、継続した観察が必要である。 ・西与賀小「いじめ0(ゼロ)」については学期初めに、また必要に応じて全校集会で児童と確認してきた。全校でいじめをなくしていく雰囲気をつくっていく上で必要であった。	・保護者、児童へのいじめ、命のアンケートは教師の観察では分からない部分を知るきっかけになり、保護者が秘密を保持しながら意見、気づきを言えるものとなっている。次年度も以降も継続したい。 ・いじめ案件等に限らず、子どもの問題があったときに、担任、管理職、関係の教職員の連携がよく取れており、この関係性は継続していきたい。 ・いじめ案件解決のベースである学級づくりについて、年間を通して意見を交換する協議会、研修会が設けられている。次年度以降もこの研修体制を継続するとともに、いじめ、命に関する授業実践の交流をめざしていきたい。
教育活動	○特別支援教育	児童理解の深化	○支援を要する児童についての個別の支援計画を作成し、支援について全職員で共通理解し実践する。 ○特別支援学級の授業を全職員が参観し、特別支援教育についての理解と指導を深め、通常学級に在籍する発達障害をもつ児童への指導に生かす。	・個別の指導計画を家庭と連携を取り作成していく。何かあった時には、その都度行動の様子を記録する。進捗状況と情報交換の場として、生徒指導・教育相談協議会を当てる。また、協議会後に目標の達成状況を見直したり、記入したりする。 ・発達障害を持った児童に対して、個に応じた具体的手立ての研修を行い、全職員の共通理解のもと取り組んでいく。 ・支援学級の授業を参観して、支援の仕方について協議し、支援学級の児童の理解を図る。	B	・支援を要する児童については、担任だけでなく、生活指導員、級外教員など学校全体での対応ができていた。毎月、生徒指導・教育相談協議会を行い、児童の実態について共通理解することができた。支援会議も必要に応じて行った。 ・特別支援教育に関わる校内研修会をすることができた。また、今年度は巡回相談を2回お願いし、通常学級在籍の発達障害傾向の児童、特別支援学級児童の指導・支援の仕方について指導をいただいた。 ・特別支援学級合同での学習を仕組み、職員が参観したことで、支援の仕方について考えたり、学級の児童の理解を図ったりすることができた。	・支援を要する児童の実態把握や指導の仕方について、さらに教職員間の連携を深めていく必要がある。 ・特別支援学級の在籍数が増えているので、交流学級との連携が重要になっている。対応の仕方については、交流学級児童にも話をしていく必要がある。インクルーシブ教育について職員の研修も行っていく。 ・特別支援学級合同の学習に加え、障害種に応じた自立活動や生活単元学習の授業について具体的に検討・実践していくことが今後の課題である。

<p>学校運営</p>	<p>○教職員の資質向上</p>	<p>学級経営の充実</p>	<p>○支持的風土のある学級経営を行い、学級経営案の達成率を80%以上にする。 ○児童への指導においては、力による指導ではなく、心に寄り添い、納得させる指導を心がけ、児童の心に訴える指導に努める。 ○互いの学級経営方針や家庭学習の取り組みについて紹介する場を設け、職員同士の共通理解と互いを高め合い、刺激し合う場を作る。</p>	<p>・各担任は年度当初に学級経営案を立案し、各学期末に達成状況を分析し、評価を行い、学級経営の実践に生かしていくようにする。 ・児童の生活指導については全職員が同じ目線や基準で取り組めるよう、指導についての情報交換や共通理解の場を設け、具体的な指導について確認しながら進めていく。 ・放課後の時間や長期休業中に、学級経営について話し合う場を設け、学級のルール、学習の習慣づけ、家庭学習の与え方などについて意見交換をし、お互いの学級経営力を高める機会をもつ。</p>	<p>B</p> <p>・全学級が学級経営案を年度当初に作成し、他の教職員も共有できるようにした。担任は毎学期末に、その学級経営について振り返りをおこなった。4段階評価のA(十分達成)・B(おおむね達成)と評価している割合が1学期末の75.0%から2学期末の段階で87%で、12%伸びた。しかし、職員アンケートの「学級経営を形式的に評価しているか」の項目は、昨年度より4ポイント下がった。学校目標から学年・学級目標へとつながる方策が必要。</p> <p>・Q-Uテストを年間2回(7月・12月)実施し、学級と個人の心の様子の変化を把握した。12月のテスト結果のアセスメントの時間を十分に取ることができず、各担任任せになった。次年度は、計画的に研修を実施する必要がある。</p> <p>・放課後の時間や長期休業中に互いの学級経営について話し合う場を設け、意見交換を行った。特に、学習のルール(かつおタイム)については、全校集会で全児童に話を繰り返し行い徹底するようにした。学級によっては、全校集会での話を受けて、道徳や学級活動に取り組んでいた。</p>	<p>・学級経営案の充実に向けて全職員で子どもたちを育てる工夫を以下の流れで行う。 【4月初め】学校目標を受けて、学教評価の子どもや保護者・職員のアンケートを見直す。学校目標・アンケート項目を受け、学級経営案を作成、全職員で各学年・学級の取組を共有化。 【7月末】QUテスト1回目を実施。学級経営案の振り返り。QUテストそのものの意義、意図を全職員で理解する研修会を実施。更に学級に関わる職員で手立ての有効性を分析、次学期に向けた手立てを計画し、2学期から実践する。 【12月末】QUテスト2回目を実施。学級経営案の振り返り。1学期同様に学級に関わる職員で手立ての有効性を分析、次学期に向けた手立てを計画し、3学期に実践。 【3月末】学級経営案の振り返り。子どもの実態と取組について、引き継ぐ。</p> <p>・学級のルール、学習の習慣づけ、家庭学習については、全校で統一して取り組むことを決め、全校集会などをつかって、全校児童にも周知する。集会で周知されたことは、必ず学年・学級で再度、指導を行う。</p>
-------------	------------------	----------------	--	---	---	--

②							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	基本的な学習習慣の確立 基礎的・基本的な学力の定着	○基本的な学習習慣を身につけた児童を80%以上とする。 ○家庭学習の習慣づくりにおいて、できている児童を90%とする。 ○スキル学習の充実を図るとともに、各種学力検査の結果を、全国や県平均と同等、またはそれ以上とする。	・学期初めには「学習の約束」(低・中・高)をもとに休み時間の過ごし方や勉強の時の約束、学習道具(筆箱・道具袋の中身等)のそろえ方等について共通理解を図り、全校で統一した指導を行う。 ・家庭学習については「家庭学習の手引き」(保護者用)「家庭学習の進め方」(児童用)をもとに、各学年の実態に応じて、読み・書き・計算の家庭学習を課すようにする。 ・家庭学習の様子について、生活パワーアップアンケートを実施する。 ・デジタルドリルを活用し、週2回(国語・算数)のスキルタイムを実施する。	A	・各学期の初めや長期休業の前に全校児童に学習習慣についての指導を行った。具体的には、「継続性」と「計画性」、「創造性(発展性)」を育む大切さについて指導してきた。家庭教育や学力向上に関するアンケート項目では、保護者は約97%が、教師は約90%程度が「よくあてはまる」「ややあてはまる」という結果であった。 ・家庭学習については4月の懇談会において手引きを配布して説明を行い、啓発を図った。また、年間4回の生活パワーアップ週間や学級懇談会を活用して担任の指導と家庭での取組を連携させて、確実に家庭学習するように指導してきた。さらに、城西校区の3校で「自学がんばる週間」を設け、主体的に学習に取り組もうとする態度を醸成してきた。その結果、授業の理解度で約9割、宿題等の提出に関しては約7割の子どもたちが肯定的な回答となった。 ・タブレットPCを活用し、児童の実態に応じたスキルタイムを週2回実施することができた。また、隔週の金曜日課後に「すくすくテスト」を実施するなど補足的な指導をすることができた。	・学習習慣や学習規律の定着をさらに図るために、「学習の約束」「家庭学習の手引き・進め方」「話の聴き方・反応の仕方」等、全職員で共通理解を図るとともに、その意義や指導方法・内容についても共通の指導へと高めていく。そして、学校の学習文化を創り上げる。 ・家庭学習習慣とともに「早寝」「学習環境の整備」「家庭でのタイムマネジメント」などについても児童への指導・保護者への啓発を図り、よりよい習慣作りにも取り組んでいく必要がある。 ・スキルタイムや「すくすくテスト」の内容・方法についても計画的・継続的に進められるものへと改善する必要がある。学習状況調査やCRTテスト等から子どもの実態を把握しながら効果的な取組のありかたについて模索していく。
教育活動	○指導法改善 (少人数・TT)	基礎学力の向上 ICTを活用した指導の充実	○算数科の基本的内容の定着率80%以上を目指す。 ○ICTを活用した算数科の学習指導について研究を進める。 ○算数科TTによる授業の様子や子どもの学習の伸びについて、保護者に情報を発信しTT指導についての理解と啓発を図る。	・形成テストやプリント・ドリル類の取り組みの結果を分析し、それを担任と共有することで補充的学習の充実を図る。 ・個の活動を充実させる効果的な見通しのためにICT機器を活用した教材を提案する。 ・担任とTTとの打ち合わせを週に1度は必ず実施する。	B	・授業の進度と児童の実態に応じて練習問題を作成し取り組ませることで、学習の補充を行うことができた。算数科の基本的内容の定着率については、市販テストの結果からどの学年も80%以上の定着率に達することができた。しかし、単元によっては80%に達していないものもあり、児童の苦手とする課題が見えてきた。 ・全職員がICTを活用できるように研修や情報交換を行った。アンケート項目を見ると、約95%の教師が「ICTを利活用しているか」という問いに対し「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答していた。 ・T1とT2の役割分担を明確にして授業に臨むとともに、必要に応じて役割を入れ替えたり、補完したりすることで、効果的に学習を進めることができた。また、習熟度別の少人数授業を行ったことで、児童の習熟の程度に合わせて学習を進めることができ、個別支援をきめ細かく、一人一人にすることができた。各学期に少人数・TT通信を発信することで保護者に授業の様子を通知することができた。アンケート結果から、多くの保護者がTTや少人数授業について肯定的に捉えていたが、よさや意義が十分に伝わっていないことも分かった。	・算数科の基本的内容の定着率が80%に達していない単元については、学習の補充を続けていく必要がある。補充については、スキルタイムを活用したり宿題プリントに盛り込んだりするなど、計画的に行っていきたい。 ・ICTを活用した今年度の実践と成果について、全職員で情報交換できる場を設定し、さらなる指導力の向上を図りたい。 ・単元や児童の実態によって、いろいろなパターンでの少人数クラスの編成を工夫し、担任とTT担当との間で十分に練られた指導方法を実践していきたい。少人数・TT通信については、伝える内容を精選するとともに、様々な授業の形態を紹介する必要がある。また授業を参観してもらおう際には、事前に実施する指導形態の意図を知らせ、児童の学びの深まりが伝わるような授業展開を計画したい。
教育活動	○学校図書館教育	読書指導の充実	○学校目標30,000冊を目指す。 ○個人目標 低学年120冊以上、中学年100冊以上、高学年80冊以上を目指す。 ○家族読書に向けた取り組みを推進する。	・必読図書やお勧めの本の紹介、多読賞の紹介などを行うことにより、読書への関心や意欲を持たせる。 ・学校だよりや図書館だより、PTA各種会議を通して家読の勧めを行い、さらに夏休みや読書週間を利用し、親子読書を勧める。	A	・図書館だよりを利用した多読者の紹介、校長による多読賞の賞状、図書館祭りでのイベントなどを通して、児童の読書意欲を高めることができた。 ・読書の質を高めるために、新たに「私の読書生活」(学年に応じたおすすめの本)を多く読んだ人を賞賛する「読書生活の木」に取り組んだ。青、黄、赤と段階を設け、図書館前に常時掲示していることで、おすすめの本を借りる児童が増えた。 ・図書館まつりでは、委員会の児童のアイデアを多く取り入れた。今回は、ドイツ語による本の読み聞かせも行った。児童が楽しく図書館へ足を向けるような手立てをとることができた。 ・給食とのコラボ、先生のおすすめの本に関するクイズなど、新しいこともたくさん取り入れた。 ・学習に関係のある本を司書の先生に早めに準備していただいたことで、調べ学習、言語活動、発展学習に大変役立った。	・図書館祭りなどのイベント効果で図書館へ足を運ぶ児童が多くなっているのので、今後も図書委員と司書の先生、図書主任と連携してイベント企画などを考えていきたい。 ・さらに読書の質を高め、またクラスの貸し出し数も増やすために、「ビブリオバトル」など、全学級の児童を巻き込むような手立てを講じたい。 ・家庭での読書習慣が身につけていない児童も見られる。家読を習慣づけるために、秋に「親子読書強化週間」を設け、保護者の意識も高めていきたい。
学校運営	◎教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	授業力の向上	○いろいろな教科において、ICTを活用した授業を進め、わかる・楽しい授業の指導技術を身につけ職員員の資質向上を目指す。 ○ICTを利活用した校内研究に取り組み、全員がICTを活用した授業の教材研究を深める。 ○ICTの活用場面の設定、展開、指導技術、指導力の向上において、職員員の90%が実感できるようにする。	・必要に応じてICT研修会を実施したり操作マニュアルを作成配布したりすることで、教師のICTスキルの向上や指導技術の情報交流とし、それぞれの授業づくりの一助とする。 ・全員がICT機器を利活用した教材研究を行い、指導力の向上を図る。 ・教育活動全体で、ICT機器(電子黒板、タブレットPC)やデジタル教科書を活用した実践を行い、報告にまとめることで実践を振り返り指導力の向上を目指す。	A	・転入職員が多い年度当初を中心にICT研修会を実施した。また、操作マニュアルも適宜配布することができた。さらに、専門的な知識や技能についてICT支援員に指導してもらうことができた。 ・全職員がICT機器を利活用した授業実践を行った。また、ICTの利活用方法を次年度の職員へ引き継ぐために、ICT実践事例集を作成した。 ・ICT機器を単元や授業に合わせて利活用しながら実践を重ねることができた。効果的な使い方について考え、デジタル教材を作ることができた。	・来年度も引き続きICT研修会を行っていくことにする。年度当初から授業に活かしていくことができるように実践的な研修会にしていきたい。また、操作マニュアルに関しても活用しやすいように整理していきたい。 ・ICT機器をどのように、どのような場で活用すれば子どもたちの学びに効果的であるのか、これまで積み重ねた実践をもとに見出していきたい。 ・一方で機器やソフトが古くなってきている面がある。予算の関係もあるが、ハード面の整備もこれから進めていかなければならない課題だと感じている。

③							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	食教育の推進	<p>○給食のマナーを守って食べ、好き嫌いをなくす食育指導を行い、残菜率を1%以下とする。</p> <p>○食育の授業を実践する。栄養職員の専門性を生かした指導を行う。</p> <p>○食器の運搬、準備、片付け等に留意し、食器の破損減を目指す。全校での破損数を年間を通し10枚以下とする。</p>	<p>・栄養職員・担任・給食委員会などで栄養についての理解を深めるための取り組みをし、好き嫌いをせずに感謝して食べる気持ちを育てる。</p> <p>・栄養職員とのTTで栄養についての授業を行い、食への関心を高め、食マナーや健康への意識化を図る。</p> <p>・食器破損枚数の記録をとり、毎月初めに月間食器破損枚数の結果を放送で発表し、食器破損減に対する意識を高める。</p>	A	<p>・残菜率0.06%となり、目標値を達成できた。</p> <p>・2年生での授業実践「げんきになるたべもの」は、お日さまを浴びた食べ物に体の中に元気のもとがたくさん残ることを知り、野菜やお魚を残さず食べようとする意識付けができた。</p> <p>・委員会による毎日の放送やパントリーチェックで、残菜ゼロや食器等の返却の仕方は良くなった。食器破損枚数が多かったため、食器破損に関しては今後も指導が必要である。</p> <p>・10月の児童集会では、食べ物の栄養について知らせ、食の大切さを感じることができた。1月の児童集会では、給食に対して感謝の気持ちをもつことができた。</p> <p>・食器破損については、目標の10枚以下を達成することはできなかった。</p>	<p>・年間計画に基づいて、計画的に栄養職員とのTTの授業を行っていく。また、授業参観時や授業のことをお便り等で保護者に知らせることで、保護者への食教育に関する啓発を進めていく。</p> <p>・委員会による毎日の放送やパントリーチェックは、児童の励みになっているので同様に続けていき、よかった学級などを紹介していく。</p> <p>・食器破損が多かった。月ごとによかった学級の紹介をしていくなど児童に意識させるようにする。</p>
教育活動	●健康・体づくり	基本的な生活習慣の確立	<p>○「早寝、早起き、朝ご飯、準備、宿題、洗面」を励行し、自分で決めた生活リズムを守る。</p> <p>○「基本的な生活習慣は身につけているか。」について、長期休業前の指導と関わらせながら、各学年で朝起きる時刻、ねる時刻、テレビを見る時間等の指導を継続していく。</p> <p>○朝食の摂取について、摂取品目と合わせてアンケート調査を行う。朝食摂取率100%を目指す。</p>	<p>・毎月の生活の目標と特に関係のある月(中学校のテスト期間に合わせた月)を強化月間とし、全職員、全児童に呼びかけ、「基本的な生活習慣が身につけているか」についての意識が高まっていくような取り組みを行う。</p> <p>・「朝食についてのアンケート」を取り、各種集会でも機会をとらえながら、朝食の大切さについての意識を高めていく。さらに、朝食の内容などについても、専門性を生かして栄養士が指導をして、意識を高めていく。</p>	A	<p>・アンケートでは、「早寝・早起き・朝ごはん」、「食生活」、「虫歯等の予防」に関する指導の項目において97%以上の保護者から「よくあてはまる」、「ややあてはまる」という評価を得た。強化月間を設けたり、計画的に授業を行ったりなどし、全職員が一丸となって児童に呼びかけた結果であると捉える。しかし、朝食摂取率が100%に満たないため、指導に改善の余地がある。</p> <p>・食育に関しては、第3学年の保健分野で栄養士及び養護教諭とともに授業実践を行うことができた。</p>	<p>・6月・10月・12月・2月の強化月間での取り組みを基盤としながら、日々の生活に生かすような児童への指導や、保護者への啓発が必要である。強化月間での取り組みをきっかけとし、年間を通して系統的に指導していく必要がある。</p> <p>・食育に関しては、6年間を見通した系統性のある指導が必要である。そのためにも、教育課程に設定された授業等を確実に実施していく。また、授業参観日に授業を組み、児童への指導だけでなく、保護者への啓発も行っていく。</p>
教育活動	●健康・体づくり	健康教育の推進	<p>○佐賀県教育委員会が推進する「スポーツチャレンジ」に学年・学級で取り組み、体力の向上を図る。</p> <p>○健康に関する授業を実践する。</p> <p>○養護教諭の専門性を生かした指導を行う。</p>	<p>・「さがんキッズ体力アップ記録カード」を参考にしながら、各学年に応じたためあてを持たせ、体育の授業の中にも体力アップのための「スポーツチャレンジ」に取り組めるように呼びかけていく。</p> <p>・体育科の年間計画の中に3年生以上は、保健に関する指導を位置づけて授業を実践する。1・2年生は、学級指導の中に位置づけて行う。</p> <p>・保健学習の授業を行う際に、担任と養護教諭によるTTの授業実践を行う。</p>	A	<p>・体育科の年間計画を見直し、各学年がスムーズに授業ができるよう時間割編成を考え、用具等が複数学年で重ならないように計画を立て、時間と用具等の確保をし児童の運動量の保障ができた。</p> <p>・縦割り活動と連携して、縦割り8の字とびを実施し、全校で「スポーツチャレンジ」に取組体力の向上を図ることができた。</p> <p>・保健に関する指導では、養護教諭を中心に、児童保健委員会の活動や全校集会で保健に関する内容を適宜取り入れることで、児童の保健に関する関心を高めることができた。また、歯みがき指導では、教職員の呼びかけを中心に関心も高まり、担任と養護教諭のTT授業で、歯の大切さについての保健学習を行った。アンケートの結果からも保護者の方や教職員の意識の高まりがうかがえる。</p> <p>・健康(性教育含む)に関する授業は、養護教諭の呼びかけや資料提供を基にして各担任が問題意識を持って授業実践することができた。また、学年に応じて養護教諭とのT・Tによる授業実践も行うことができた。</p>	<p>・全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果はおおむね県平均と同等か、やや下回る結果になった。朝や休み時間に積極的に体を動かす子どもも多いが、体育の授業以外にほとんど運動をしない子どももいる。縦割り活動の時間を活用し、「スポーツチャレンジ」の縦割り八の字とびに取り組ませる活動を今後も進めていき、体を動かす楽しさを味わわせ、昼休み等に体を動かす習慣を身につけさせていきたい。また、それぞれの種目結果を本校教職員で共有し、授業や体育の行事に対して課題意識をもって進めていきたい。</p> <p>・健康(性教育含む)に関する授業は今後も積極的に養護教諭が関わり、TTによる授業を実践し、専門的な知識を活用した授業づくりをすすめていきたい。児童が自ら関心や意欲をもって歯みがきの習慣が身につくように、給食後の歯磨きの呼びかけや長期休業中の歯磨きカレンダーなどの実施により、継続して指導をしていきたい。</p>

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○地域・家庭と共に歩む学校づくり	開かれた学校づくり、市民性を育む教育の推進	○社会科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、クラブ活動等と関連させた年間計画を作成し、西与賀の子どもの未来を考える会(応援団)と連携した活用シートを作成する。 ○家庭や地域に向けて学校だより、ホームページ等を活用し、学校の情報を継続して発信し、保護者の90%以上に取り組みを知ってもらう。 ○地域の行事に積極的な参加を促し、子どもたちが地域社会で意欲的に活動できる場を作り、90%の児童に地域の一員であることを自覚させる。	・社会科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、クラブ活動等と関連させ、地域の人やもの、ことが学習の場、素材となるような単元・題材を計画し、地域の教育力を生かした学習を仕組む。 ・地域教育コーディネーターを活用し、西与賀の子どもの未来を考える会(応援団)の整理・活用・促進を図る。 ・学校だより、ホームページ等を活用し、学校の情報を迅速に継続的に発信していく。また、そういった取り組みを地域や学校行事で知らせていく。 ・昼の放送の時間をつかい、地域行事を積極的に広報していく。また、地域行事へ参加を促すために「にしよが祭り」や「にしよが文化祭」を地域と共同で企画・立案していく。	A	・地域教育コーディネーターを中心に行事や開催時期、願する団体などを一覧にした応援団リストを作成した。 ・ホームページに学校便りを載せたり、行事の後に担当学年でブログの更新をお願いしたりして情報を発信してきた。保護者アンケートの結果では「学校の様子を知らせている」の項目で約99%、「コミュニティ・スクールについて知っているか」の項目で約95%から肯定的な回答を得ることができた。 ・「にしよが夏祭り」「にしよが文化祭」の話合いにも学校から参加した。また校区民運動会で児童からボランティアを募り、地域の中で活躍する場を作ることができた。児童アンケートの結果では約88%の児童が肯定的な回答をしており、おおむね達成することができた。	・地域の方と連絡を取り合ったり、地域のことを調べたりして、現在行っていることを継続できるようにしていきたい。 ・行事についてはこれまで同様、各学年からブログを使って情報発信をしていきたい。また、学校運営協議会の様子などについても発信していくために、ホームページのコミュニティ・スクールのコーナーを活用していくようにする。 ・校区民運動会の児童ボランティアを継続していきけるようにはたらきかけたい。そのために中学生のボランティア同様に専用のピブスを作成し、児童の意欲を高めていきたい。他の行事についても児童の活躍の場が見込める場面を見つけ、広げていくことで、地域の一員であることを意識できるようにしたい。
教育活動	○地域・家庭と共に歩む学校づくり	低学年の基礎学力の定着を図るための学習習慣・生活習慣の育成	○基礎学力や学習・生活習慣を身につけさせるために、指導を繰り返し、90%以上の児童に身につけさせる。 ○アンケート項目「基本的な生活習慣は身につけている」「進んで読書をしている」の保護者達成率を、90%以上にする。	・西与賀小学校の学びのルールを常に意識させ、「かつお」タイムの徹底をはかり、学習習慣を身につけさせる。 ・学校及び家庭で基本的な生活習慣を身に付けさせるために、学年に応じた指導を徹底し、さらに学年便りや学級便り、学期ごとの懇談会の時間等を活用して学校と家庭で共通した指導が行えるようにする。 ・読書については、あしのご読み読みの時間を児童と共有し、その都度機会を作り読書意欲を高めていく。	B	・学習習慣については、学校生活での様子や、保護者アンケートで、家庭学習にきちんと取り組んでいるという項目について、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の評価で100%となっており、よく身につけているといえる。学校や家庭での日々の声かけと確認やできたことへの賞賛の言葉が良い結果を生んでいると考えられる。 ・家庭への連絡については、クラスの実態に応じて学級通信や連絡帳、電話連絡などで随時連絡を密に取り、学校の指導の在り方への理解を図るようにした。 ・学校の図書室は多くの子どもが進んで頻りに利用しているが、個別に声をかけないとなかなか図書室に通わない児童もいるので、集計を見ながら、随時声かけ指導を続けた。家庭における読書については、定着しているとはいいがたく、今後の課題ともなる。	・授業の始まる時に立腰の時間を取り入れることで、落ち着いた雰囲気での学習を始められるようになってきている。引き続き「かつおタイム」の意識づけや学習に集中する姿勢を高めることができるように、声かけや賞賛の言葉かけを続けていきたい。 ・家庭学習についても、今年度同様、家庭学習の意味の理解を図り、確認を確実にすることで、習慣として定着させる。さらに、自学のモデルを示したり、自学ノートの紹介をしたりして、自学への取り組みを進める。 ・読書指導については、毎月図書室から月末に配られる集計を活用し、自分の読書について意識させるようにしたり、休日を利用した読書を進めたりして、家庭での読書につなげる。また、学習と関連する図書の紹介を心がけ、内容を意識した読書につなげるようにしたい。

#### 4 本年度のまとめ ・ 次年度の取組

##### 【本年度のまとめ】

- 学校運営・教育活動全般について  
「教育目標」について90.4%(平成28年度90.1%)でほぼ周知・理解された。  
「コミュニティ・スクール」について99%の保護者が理解しており、88%の児童が「地域の一員として地域を大事にしていこうと思う」と肯定的な回答をしている。  
学校だよりに学校目標を明記したり、地域やPTAの会議等で学校目標を話題にしたりすることで周知徹底を図った。今後もあらゆる機会を通して、学校の取り組みを理解してもらえるよう手だて等を工夫したい。
- 「心づくり」について  
2学期にいじめに関する事案を4件覚知・認知をしたが、関係職員で連携して対応した結果、早期に収束に至った。今後も「子どもの笑顔」を中心に据えた学校運営を全職員で行っていききたい。
- 「知づくり」について  
ここ数年の課題である「家庭での読書」が最重点課題であったが、昨年度に続き改善が見られなかった。次年度は家読を習慣づける取組として「親子読書強化週間」を行い、PTAとの連携を行いながら改善を図っていききたい。
- 「体づくり」について  
学校での「早寝・早起き・朝ご飯」の取組については97.1%の保護者が評価し、各家庭での取組についても95.2%の保護者が「取り組んでいる」と回答している。今後も家庭との連携を図り、子どもの生活改善に取り組んでいきたい。

##### 【次年度の取組】

- ・心の教育を推進するために、日々の掃除の充実、くつろえ、あいさつを通した心磨きの取組を行う。また、来年度も継続して「子どもの生活アンケート」と「いじめ・命のアンケート」を実施し、いじめ等の未然防止に向け、子どもの小さなサインも見逃さない、アンテナ、意識づくりを図っていききたい。
- ・開かれた学校づくりの推進に向けて、家庭・地域と連携・協力し、子どもの出番・役割・承認の場を数多く設定し、学校・家庭・地域で「自分らしい生き方のできる子」の育成を図っていききたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目